

シリーズ 10『天皇の国史』第一部

「日本の神代から弥生時代」コース

第 2回 天皇の国史「日本の神世・先史」

- * 古事記と旧約聖書の宇宙観
- * 国生みと神生み
- * 日本人の起源
- * 岩宿人のDNA解析
- * 岩宿人の祖先

出典：「天皇の国史」竹田恒泰著（PHP文庫）
「日本人になった祖先たち」篠田健一著（NHK出版）
「面白くて眠れなくなる進化論」長谷川英祐著（PHP）
「古事記」（竹田恒泰 学研）、「日本書紀」（宇治谷孟 講談社）
など

1. 古事記と旧約聖書の宇宙観

(1) 古事記の宇宙観

参照資料2-1

① 古事記の冒頭

- ・冒頭で最初の神が成った様子を記すが、天地が発(あらわ)れる様子の記述はない。

「天地《あめつち》初めて発(あらは)れし時、高天原《たかまがはら》に成りし神の名は、天之御中主神《アメノミナカヌシノカミ》。

次に、高御産日神《タカムスヒノカミ》。

次に、神産巢日神《カムムスヒノカミ》。此の三柱《みはしら》の神は、並《とも》に独神《ヒトリカミ》と成り坐《ま》して、身を隠しき。

.....

次に、伊耶那岐神《イザナキノカミ》。次に妹《いも》伊耶美岐神《イザナミノカミ》」

② 古事記では「宇宙が神を創った」

- ・神が宇宙を創ったのではなく、宇宙が神を創ったという世界観である。
- ・神道的世界観に依れば、人の祖先は神であり、神は大宇宙あるいは大自然のエネルギーが作り出した。序列は、「自然⇒神⇒人」になる。
- ・日本人にとって、神とは、「大自然」「大宇宙」なのである。

(2) 旧約聖書の宇宙観

① 「初めに神(ゴッド)は天と地を創造した」と記述する

- ・既に神が存在しているところから物語は始まる。
- ・宇宙を創造した唯一絶対かつ全知全能の神が居てその神が全宇宙を統括している。

② 神は天地万物の創造主

- ・宇宙、自然、人、動物、植物などあらゆるものは神から創られる。
- ・神は自らの姿に似せて作った「人間」に思いがあり、大自然の管理を「人」に委任し、食料として動植物を「人」に与えたと記述する。
- ・キリスト教の世界観は、「神⇒人⇒自然」

2. 国生みと神生み

参照資料2-2-①

古事記では、伊邪那岐神と伊邪那美神より前に成った別天神(ことあまつかみ)と神代七代(かみよのななよ)の神々は、総意によって末っ子の伊邪那岐神と伊邪那美神に国造りを命ずる。

(1) 伊邪那岐神と伊邪那美神の国生み

① 淤能碁呂島(おのごろじま)

- ・二柱は天の浮橋で、海に矛を降ろし、「こおろ、こおろ」と海水を掻き鳴らして矛を引き上げる。
- ・銚の先から海水が滴り落ち、潮が固まって島が出来た。その島を淤能碁呂島という。

② 淤能碁呂島での国生み

* 二柱の神の最初の交わり

- ・伊邪那美神が「あなにやし、えおとこを(あなたはなんていいおとこななのでしょう)」と仰り、伊邪那岐神が「あなにやし、えおとめを(あなたはなんていいおんなでしょう)」とお答えになって交わった。
- ・二柱に出来損ないの子(水蛙子:ひるこ)が生まれた。
- ・高天原の神に相談して占うと、女神から声を掛けたのがいけないことが分かる。

* 二柱の神の二度目の交わり

- ・再び、淤能碁呂島に戻って、今度は伊邪那岐神が「あなにやし、えおとめを」と仰り、伊邪那美神が「あなにやし、えおとこを」とお答えになって交わると、次々と立派な島が生まれた。
- ⇒日本には「言霊(ことだま)」と言うように言葉に霊力があると考えられた。

この古事記の逸話は、結婚は男が申し込み、女の承諾を得て成立すると観念されてきた。

・大八島国(おおやしまのくに)

大八島の生まれた順に、「淡道之穂之狭別島(淡路島)、伊豫之三名島(四国)、隠伎之三子島(島根県隠岐諸島)、筑紫島(九州)、伊伎島(長崎県壱岐島)、津島(長崎県対馬)、佐度島(新潟県佐渡島)、大倭豊秋津島(本州)」の八つの島(古事記)。

(2) 伊邪那岐神と伊邪那美神の神生み

①二神による神生み: 17柱

参照資料2-2-①、②

- ・先ず住居に関する神々、
- ・次に海や河など水に関する神々、風、木、山、野など大地に関する神々、
- ・そして、船、食べ物、火など生産に関する神々
- ・伊邪那美神は火神＝火之迦具土神(ヒノカグツチ)をお生みになられる時、陰部(ほと)に重大な火傷を負い、その火傷が原因で命を落とす。

②伊邪那美神の火傷の苦しみから生まれる生産の神: 15柱

- ・鉾山、土、水の神々と生成の神の和久産巢日神(ワクムスビノカミ)を生み。
- ・和久産巢日神の御子神が豊宇気毘売神(トヨウケビメノカミ)です。

③伊邪那岐神から生まれた神々: 35柱

* 迦具土神の血からなる神

- ・伊邪那美神の亡骸を比婆山に葬ったが、悲しみは治まらず、十拳剣(トツカノツルギ)で迦具土神の首を刎ね、その血潮から八柱の神が成る。
⇒迦具土神の強調は、先人の「火」に対する価値観を表している。
火は破壊の力を持ち人の命を奪うこともあるが、制御することでモノを生み出す力がある。

* 黄泉帰りの禊払いからなる神

- ・伊邪那岐命は黄泉の穢れから身を清めるために、竺紫(つくし)の日向(ひむか)の橘の小門(をど)の阿波岐原(あはきはら; 現在の宮崎県宮崎市阿波岐原町)で禊を行った。
- ・禊のために衣を脱ぐと12柱の神が生まれ、禊で14柱の神が生まれる。
- ・禊の最後に顔を注いで三神がうまれた
 - ＋左の目を洗うと天照大御神(アマテラスオオミカミ)が生まれた。
 - ＋右の目を洗うと月読命が生まれた。
 - ＋鼻を洗うと建速須佐之男命(タケハヤスサノオノミコト)が生まれた。

③伊邪那岐神の神命

伊邪那岐命は最後に三柱の貴い子を得たと喜び、三神に委任した

- ・天照大御神に首飾りの玉の緒を渡して高天原を委任した。その首飾りの玉を御倉板拳之神(ミクラタナノカミ)という。
- ・月読命には夜の食国(をすくに:夜の世界)を、
- ・建速須佐之男命には海原(うなはら)を。

(3) 誓約神話の解釈

①誓約神話により成った神(古事記)

参照資料2-3

* 事の始まり

- ・須佐之男命は海の統治を命ぜられたにも拘わらず、泣いてばかりいた。
- ・伊邪那岐神が問いただすと、母のいる根之堅洲国に行きたいという。
- ・伊邪那岐神は高天原から須佐之男命を追放した。
- ・須佐之男命は姉の天照大御神に別れを告げようと高天原に上った。
- ・天照大御神は須佐之男命が高天原を奪いに来たと思い、武装して待ち受ける。
- ・須佐之男命は天照大御神の誤解を解くために「誓約」をして子神を産む提案をされる。

* 天照大御神は、須佐之男命の持っている十拳剣(トツカノツルギ)を受け取って噛み砕き、吹き出した息の霧から以下の三柱の女神(宗像三女神)が生まれた。

* 須佐之男命が、天照大御神の「八尺の勾玉の五百箇のみすまるの珠」を受け取って噛み砕き、吹き出した息の霧から以下の五柱の男神が生まれた。

⇒これにより須佐之男は「我が心清く明し。故れ(それゆえ)、我が生める子は、手弱女を得つ(たおやかな女の子が生まれた)。」と勝利を宣言。

②三女神と五男神はどちらの子神か

* 従来の理解

- ・須佐之男命が、生まれてきた女神は自分の子であると述べ、天照大御神はそれに異論を述べていない。
- ・そのことから、女神三柱は須佐之男命の子神、男神五柱は天照大御神の子神と理解されてきた。

* 日本古来の「物実(ものざね)、息吹、唾液」への考え方

- ・古来日本では、モノには持ち主の精魂や生命が宿ると考えられてきた。
- ・「息を吹き込むと」という言葉があるように、息吹にも精魂や生命が宿ると考えられてきた。
- ・「唾を付ける」という慣用句にあるように、口を付ける食具が人に属し、その人の魂が宿ると考えられてきた。

* 誓約神話で成る神は両神の子

- ・アマテラスの行動: 霧(スサノオの剣+水+アマテラスの息と唾液)の発生⇒女神3柱が成る。
 - ・スサノオの行動: 霧(アマテラスの珠+水+スサノオの息と唾液)の発生⇒男神5柱が成る。
- ⇒両神の有する物実(ものざね)、息吹、唾液が相互に密接に関係することから、誓約で成った子神は両神による生成と結論できる。

(4)三種の神器の始まり

①誓約に勝った須佐之男命

- ・高天原で田の畔を壊し溝を埋めるなど大暴れする。
 - ・天照大御神はお怒りになり、天の岩屋(いわや)に身をお隠しになった。
- ⇒すると、高天原と葦原中国はたちまち闇に包まれ、災いが広がった。

②神々による神楽

- ・困った神々は相談し、八咫鏡(ヤタノカミ)と八尺瓊勾玉(ヤサカノマガタマ)をつけた御幣(ごへい)を作り、
天の岩屋の前に集まり、にぎやかな神楽を始めた。
 - ・天宇受売命(アメノウズメノミコト)が乳房もあらわに踊りだし、服の紐を陰部まで押し下げると、
神々は一斉にどよめき笑った。
 - ・不思議に思った天照大御神が岩屋戸(いわやと)の隙間から外を覗くと、天宇受売命が「あなた様
より尊い神がいらっしゃいます。それ故に、我々は喜び、笑い、そして待っているのです。」と
申し上げた。
 - ・天照大御神は驚いて岩屋戸から外を覗こうとされた。
 - ・その瞬間、構えていた天手力男神(アメノテヂカラオノミコト)が天照大御神の御手をつかんで外へ引き
出し、後方へ注連縄(しめなわ)を張って戻れないようにした。
- ⇒世の中に光が戻った。

③この逸話の解釈

- ・高天原が暗くなると葦原中国も同じように暗くなったことから、二つの世界は同じ秩序の上に成り
立っていることが分かる。
- ・この神楽に際して作られた八咫鏡と八尺瓊勾玉は三種の神器として歴代天皇に継承される
ことになる。

3. 日本人の起源

(1) 人への進化

①ダーウィンの進化論は「種の起源」で生物の多様性を説明した

- ・現存する生物種は環境に適応できた結果、淘汰されずに生き抜くことができた。(自然淘汰)
 - ・何らかの原因(DNAの損傷や転写ミス)により、突然変異が起き、その個体が環境に適応できると子孫が生き延びその変化した種が存続する。
 - ・キリンは高いところにある葉を食べたいと思ったから伸びたのではなく、たまたま首が伸びてしまった個体が環境に適応したために生き延びた。
- ⇒ダーウィンは遺伝の性質を見抜いていた。

②従来の進化論と現在の学説

* 従来の学説: 単一種仮説

- ・猿が猿人、原人、旧人、そして新人に変化した。
つまり、木の上で暮らしていた猿が体や環境に何らかの変化が生じ、草原で暮らす個体群になり、二足歩行するように変化した猿人、猿人が手を使うようになって脳が発達した原人、北京原人は火を使っている。更に進化し墓に花を添えるネアンデルタール人の様な旧人、旧人が進化したのが新人で現生人類(ホモサピエンス)と説明。
 - ・しかし、現代のDNA解析によれば、約300万年～150万年前のアフリカには少なくとも6種類の人類が生息していた。
 - ・魚が海から陸に上がったという進化は余りに不自然で自然淘汰では説明がつかない。
- ⇒人の存在は進化論では説明ができない。(村上和雄博士)

(2) 世界最古の磨製石器

①ヒトの違いを決定づけるもの

- ・磨製石器は猿には作れない。

①ヒトの違いを決定づけるもの(つづき)

- ・人類の文化は打製石器を作ることから始まり、磨製石器と土器を作るように発展する。
人間の文化の始まりと考えられる。

②岩宿遺跡の磨製石器

* 先土器時代

- ・磨製石器と土器が出現するまでの文化を「先土器文化」といい、その時代を先土器時代という。
考古学では世界に合わせて「旧石器時代」という。
- ・日本列島では、最初期から打製石器と磨製石器の両方が出土する。
- ・世界最古の磨製石器は群馬県岩宿遺跡の関東ローム層の中から発見された。
昭和21年にアマチュア研究家相沢忠洋氏により発見された。

参照資料2-4

* 岩宿遺跡

参照資料2-5-①

- ・遺跡は3万8千年前に存在し、出土した磨製石器は約3万5千年前のもので、現在世界最古である。
- ・列島最初の土器が出現するまでの期間を「岩宿時代」と呼ぶことが提唱されている。
世界の考古学では「後期旧石器時代」に該当する。
- ・本書では、その時代の人々を「岩宿人」、その時代の文化を「岩宿文化」と呼ぶ。
- ・岩宿時代は3万8千年前から始まり、最古の土器が出現する約1万6300年前までの間となる。

* 日本での後期旧石器時代の始まりは何時か

- ・放射性炭素年代測定法の実用化は、動植物の遺物の年代をかなり正確に測定できるようにした。
- ・日本列島で岩宿遺跡の後に、後期旧石器時代の遺跡が発見されてきている。
- ・3万8千年前の遺跡には、貫の木(かんのき)遺跡(長野県上水内郡信濃町)、石の本(いしのもと)遺跡(熊本県熊本市東区)
- ・3万7千年前の遺跡には、上萩森(かみはぎもり)遺跡(岩手県奥州市)、八風山(はっふうざん)Ⅱ遺跡(長野県佐久市)、瀬田池野原(せたいけのはら)遺跡(熊本県菊池郡大津町)
- ・3万6千年前の遺跡になると急増し、夥しい数の遺跡が加わる。

*** 日本列島に3万8千年前から短期間に後期旧石器文化が伝播した。**

- ・3万5千年以前の後期旧石器時代初頭でも81ヵ所あり、北海道から九州、そして種子島まで分布する。最も多い地域は関東甲信である。
- ・2万年から1万5千年前にかけての後期旧石器時代末には、1792ヵ所の遺跡があり、関東甲信と九州に集中し、次に北海道と越後に多い。

⇒後期旧石器時代(岩宿時代)の遺跡は現在、1万160ヵ所が登録されている。

(3) 日本列島には何時から人が住んでいたか

① 日本列島は世界の文化の最先端

*** 人間の文明を表す磨製石器は世界最古**

- ・一般的に、世界の4代文明として「支那文明(前7000年～)」、「インダス文明(前2600年～)」、「メソポタミア文明(前3000年～)」、「エジプト文明(前3000年～)」を紹介し、これらの文明を原点として文明が伝播したとする。しかし、
- ・世界で磨製石器が使用されるのは約1万年前である。
- ・岩宿文明を始めとする日本列島の磨製石器は、3万5千年以前から大量に出土する。

⇒日本列島の磨製石器の文化は世界に比べ2万5千年以上進んでいたことになる。

サイト参照

*** 世界最古の釣針も岩宿時代**

- ・平成28年、沖縄県南城市のサキタリ洞で約2万3千年前の地層からニシキウズ科の巻貝で作った貝製の釣針が発見される。
- ・これまでの世界最古の釣針は、約1万8千年前のパプアニューギニアの釣針。

参照資料2-5-②

②日本の石器文明の発展

- ・第1段階: 斧状の磨製石器を使い始める。
森に覆われた日本列島では木の伐採や加工用に用いた。
- ・第2段階: ナイフ形石器を主にする時代
石を打ち欠いて薄くはぎ取った石片の縁は刃として使った。
- ・第3段階: 細石器(さいせっき)を使い始める段階
槍の先やナイフとして用いられたと考えられています。

参照資料2-5-②

③日本人は最初から日本人

* 日本列島の成り立ち

- ・地質学的に言うと、約8千年前に現在の形になった。
- ・直近で氷河期に入ったのは約260万年前からで、約1万9千年前が一番近い寒冷期の最寒期で、
当時の海水面は今よりおよそ120m低かった。
- ・北海道はシベリアと陸続き、津軽海峡は本州と繋がり、対馬海峡は幅15Km、水深10mの水道。

参照資料2-6

* 従来の学説: 大陸から文化を持った人が日本に渡ってきた。しかし、

- ・日本列島は、大陸より約2万3千年も早い時期に磨製石器が使われていた。
- ・文化は高い処から低い処へ流れるものであり、その逆はない。
- ・現生人類の文化は日本列島で芽生えたことになり、大陸やその周辺地域にはその文化は無かった。
磨製石器は日本から大陸へ流れたと考えられる。

* 岩宿人こそ「最初の日本人」と捉えるのが妥当である

- ・先土器時代以前に「日本人」がどこか別の地域から文化を携えて日本列島に渡ってきた事実はなく、
日本文明が他の文明の亜流と言うこともない。
- ・日本人はどこからか来たのではなく、「日本人は最初から日本人だった」。

④日本列島の現生人類

* 打製石器文化

- ・平成15年(2003年)からの金取遺跡(岩手県遠野市宮守町)の調査で、この遺跡が9万年から3万5千年前の遺跡であり、斧型の打製石器が出土し国内最古とされた。
 - ・平成21年(2009年)、砂原遺跡(島根県出雲市)から出土した打製石器が、12万年から11万年前で国内最古とされた。
 - ・平成22年(2010年)、竹佐中原(たけさなかはら)遺跡(長野県飯田市)からの石器群は5万年から3万年前と公表された。
 - ・3万8千年以前の日本の中期旧石器時代の有無は、その基準判定を学会で論争中である。
- ⇒磨製石器より前の時期に列島に未熟な打製石器文化があったことが判明した。

* 岩宿時代の人骨

- ・日本列島は、1万年前以前の火山噴火による火山灰の堆積で酸性土壌の地域が多い。そのため、骨は分解されやすく人骨や獣骨の出土は少数である。
 - ・日本列島の最古の人骨は、昭和43年(1968年)に山下町第一洞穴遺跡(沖縄県那覇市山下町)で発見された。一緒に出土した炭化物の放射性炭素年代測定の較正^注(こうせい)年代で約3万6千年前。
(注)当時の大気中のC¹⁴変動にC¹⁴年代を参照させて実際の年代を求めるということ。
- その他、平成24―28年(2016年)、白保竿根田原(しらほさおねたばる)洞穴遺跡から出土。約2万7千年前。
- ⇒日本列島では、3万8千年より前の人骨は発見されていない。

サイト有

* 日本列島の現生人類

- ・ミトコンドリアDNAの解析が可能になって、現生人類は総て20万年―10万年前にアフリカで出現し、約6万年前にアフリカを出て世界に広がった「アフリカ単一起源説」が確定した。
- ・この説によると、日本列島の約12万年前の砂原遺跡の打製石器は現生人類ではなく、旧人が作った石器になる。

*** 日本列島の現生人類(つづき)**

- ・ 日本列島に最初に現生人類が現れたのは、人類学と考古学では4万年前から3万7千年前とみられる。それは分子生物学のY染色体の日本固有のハプログループD1a2aの起源年代(4万年前から3万5千年前)とほぼ一致する。 (注)2020年、D1bはD1a2aに名称変更(ISOGG)

参照資料2-9

*** 日本列島で「ヒト」が「人間」に才覚(エ夫する知恵を持つこと)した。**

- ・ 約3万8千年前の世界最古の磨製石器が日本で出土している。
文化を持たなかった現生人類が日本に到達してから文化に才覚したことを意味する。
- ・ 日本列島は周辺地域と比較して自然の恵みが豊かであるため、食料を確保する時間が大幅に短くなった。
- ・ 道具を改良することに自由になった時間を費やすことができるようになり、磨製石器が出来たと考えられる。

4. 岩宿人のDNA解析

(1) DNA解析の種類

人間の起源解析の手法は、「mtDNA解析」、「Y染色体DNA解析」、「核ゲノムの解析」の3点が重要になった。

(2) ミトコンドリアDNA(mtDNA解析)から分かった日本人の起源

①現生人類は、6万年前に出アフリカを果たした。

②3つの集団の分布

- ・約6万年前から4万年前(南ルート): インド、東南アジア、オセアニア
- ・約4万5千年前(北ルート): 中央アジア、シベリア、華北、東アジア
- ・約4万年前(西ルート): 西アジア、中東、欧州

参考資料2-7

参考資料2-8

③日本人のハプログループ

- ・日本列島を中心としたハプログループはM7a(約2.5万年前)とN9b(約2.2万年前)である。
- ・日本に最初に至った現生人類は、北ルートから分岐した集団(ハプログループN9b)と推定されている。
- ・次に、岩宿文化を担った南ルートからの集団(ハプログループM7a)と推定できる。M7aの兄弟系列にbとcがあり、bは支那南部地域、cは東南アジア島嶼部。
- ・日本列島を中心としないハプログループD4。D4の兄弟系列D5は支那南部を中心とするグループ。縄文人には少なく、弥生時代以降に日本列島に来たグループと推定できる。
- ・日本独自のハプログループは縄文人、現代日本人にも存在する。

参考資料2-7

④岩宿人の形成

- ・M7aを母体とする日本列島の縄文人集団に、N9bとD4が加わって3系統の混血で岩宿人が形成された。
- ・そこに、弥生時代以降に日本列島に来た帰化人のD5とN9aが加わり、北海道ではオホーツク文化人のYが加わり、日本人が形成された。

(3)Y染色体から分かった日本人の起源

①日本列島起源のハプログループ

参考資料2-9

- ・現代人のY染色体DNAのハプロタイプを比較することで、遡って民族の移動を推定することができる。
- ・現代日本人でいえば、C,D,Oの3系統が全体の90%以上を占めている。
- ・モンゴル人、中国人、韓国人のハプログループが日本人より単純なのは、占領地の男性を皆殺しにするような恐ろしい戦争と略奪の結果、限られた男子しか子孫を残せなかった。
- ・日本人のY染色体DNAハプログループがより多様なのは、岩宿社会と縄文社会が外来の人々を拒絶せずに受け入れ、共生を図ってきたことによる。

⇒日本列島を起源地としたハプログループはD1a2aとC1a1の2種類がある。

参考資料2-10

②列島起源でないプログループ

参考資料2-10

現代日本人に一定数ありながら、日本列島を中心としないハプログループがある。O1b2とO2である。

◆O1b2

- * 縄文時代以降に日本列島に渡ってきた集団であり、約2800年前に支那の長江中下流から日本に渡来して水田耕作を伝えた集団で、長江文化の担い手とされる。
- * 弥生時代に渡ってきたが短い期間で現代日本人の約3割にまで拡大する。その理由は、
 - ・大和朝廷が支那大陸と朝鮮半島から優秀な官僚や技術者を招き厚遇したこと。
 - ・彼らも日本に帰化して、天皇の臣下として朝廷の要職を担ったこと。

⇒一般人よりも高い比率で子孫を残した。

◆O2

- * O2は東アジアと東南アジアにおける最大勢力で漢民族の6割以上、朝鮮民族の約半数、日本人の約2割にある。

⇒古墳時代に大陸から日本列島にやって来た渡来人である。

③現代日本人のDNA

参考資料2-11

* Y染色体では10系統以上の系統がみられる。D系とE系は特殊なYAP遺伝子を持つ。

* YAPという変異

読本参照

- ・YAPという変異で定義される。本来ならばtRNA、rRNAなどの核内低分子RNAに転写されるべきものが、何らかの要因によってY染色体上のDNA配列に挿入されてしまったという変異で特殊なハプログループである。
- ・E系統の古代ユダヤ系人種と日本人にあるD系統の人種は6～7万年前 にアフリカに住んでいた一人の男性(俗称: YAPアダム)にこの変異が起こり、これが父系で遺伝した。